The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	二十世紀の中国における『左伝』の文献整理と成果
Author(s)	張, 尚英
Citation	中国研究集刊. 2017, 63, p. 50-73
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/70145
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中国研究集刊　果号（総六十三号）平成二十九年六月　五〇―七三頁

〔特集〕

二十世紀の中国における『左伝』の文献整理と成果

張　尚英
（湯城吉信　訳）

［要旨］本稿は、中国の二十世紀の政治、社会、思想文化等各方面の変化と発展に基づき、一九〇〇年～一九四九年、一九四九年～一九七六年、一九七六年～一九九九年の三段階に分けて、二十世紀の『左伝』の文献整理と成果とを分析する。政治制度と学術環境が変化したことにより、従来の文献整理の目的が研究を主としたのとは異なり、二十世紀の『左伝』の文献整理は普及に重点が置かれた。西洋の学術と白話運動の影響を受け、この時期の文献整理には新式標点や白話翻訳など以前にはなかった形式が出現した。普及に重点があったため、研究を目的とする文献整理は少なく、学術的に影響力のある著作は比較的少ない。だが、『春秋』経伝の普及を促し、『春秋』学の研究を推進するために良好な基礎を築いた。同時に、独特の価値を有する『左伝』に対して学界は研究を継続し、廖平『春秋左氏古経説義疏』、呉静安『春秋左伝旧注疏証続』、楊伯峻『春秋左伝注』など優秀な注釈書も誕生した。

［キーワード］二十世紀　中国　『左伝』　文献整理　分析（評析）

文献の注釈と整理は、中国の伝統学術の研究の主要な方法であり、古代の文献、特に経典文献が現在まで伝わり現代人が読むことができるのは、主に整理のお陰である。『左伝』について言えば、杜預、孔穎達たちの整理

がなければ、『左伝』及びその関連文献はおそらくなくなっていたであろう。二十世紀に入って、政局の変化、中国文化と西洋文化の接触、中国の学術の転換、西洋の新式標点の導入、白話文運動が興りやがては白話文が文言文に替わって主要な使用言語になったことなどに伴い、『左伝』の整理は多くの成果を挙げ、それまでの時代とは違った特色を呈し、またいくつかの発展段階が見られた。以下、一九〇〇年～一九四九年、一九四九年～一九七六年、一九七六年～一九九九年の三期に分けて論述したい。

一、一九〇〇年～一九四九年

一九〇〇年から一九四九年の中国は、時局が揺れ動き、大きな変化が起きた。政治の面では、辛亥革命により中国で数千年も続いた帝制が崩壊し、その後様々な運動や戦争や続いた。例えば、一九一六年の袁世凱討伐、一九二五年の北伐革命、一九二七～三六年の国内戦争、一九三七～四五年の抗日戦争、一九四六～四九年の国共全面内戦等があり、さらに一九一二年に経学科が廃止され、経学は二千年余り続いた官学の地位を失い、儒学は主流イデオロギーとしての政治的基礎を徐々に失い、形骸化した儒学は解体した。思想文化方面では、「五四」運動により、孔子、伝統文化、倫理道徳に容赦なき批判が展開され、儒学は神聖な地位から引きずり下ろされた。同時に、様々な西洋学術文化思潮が押し寄せ、中国の伝統文化に絶え間なく衝撃を与えた。儒家の経典はそれまでの神聖性を次第に失い、学術研究の客観的対象の一つとして、西洋の学問体系の文、史、哲などの学科に別々に入ることになった。中国は、伝統から現代に向かって転換する重要な時期にあり、古いものが抹殺され、新しいものが形成されつつあった。そこで、この時期の『左伝』の文献整理は、以前の形式を踏襲するものもあれば、全く新しい方式もある。また、学術的注解もあれば、時事に触発された評論の作もある。

（一）評釈（原文「評点」）

『左伝』学の発展史においては、注疏という文献整理の形式の外に、評釈という形式がある。注疏が語義や典故解説及び文義、義理の検討などを重んじるのと違い、評釈は「テキストの文脈、構造の分析や人物評価、史実の検討、義理を明らかにすることに重きを置く」（注1）。注疏と比べて、評釈体の分析は簡単明瞭で、初学者が『左伝』を理解するのに適しており、『左伝』を普及させ

る著作形式として伝統的に存在した。南宋以前にも、評釈の観点から『左伝』に断片的議論を行ったものがあった。例えば、南宋の呂祖謙『東萊博議』、真徳秀『文章正宗』、朱申『春秋左伝詳節句解』は比較的簡単な『左伝』評釈の作である。その後、明の万暦以後、『左伝』評釈は急速に発展した。二十世紀になって、『左伝』評釈は衰退期に入ったが、なお重要な文献整理の方式の一つであり続け、違う角度から『左伝』に対して評釈を行う重要な成果がいくつか出た。この時期の評釈で重要なものに、呉曽祺『左伝菁華録』、呉闓生・劉培極合評『左伝文法読本』、呉闓生『左伝微』、林紓『左伝擷華』、楊鐘鈺『春秋左伝擷要』、何漱霜『左伝文法研究』等がある。

呉曽祺『左伝菁華録』は『左伝』の編年体の形式を踏襲し、魯公の年月によって各篇を並べ、『左伝』の文を選んで簡単な注と評釈とを加えている。その注釈は主に杜預と林堯叟の説を採用し、二氏の説が妥当でない箇所には、一段下げ「案ずるに」の字を加えて区別し、自分の修正意見を述べている。呉曽祺は「文は『左氏』を以て至れりと為し、文を論じて『左氏』に及ばざるは、猶ほ之れ山に登りて其の頂に陟らず、水を測りて其の源を探らざるごとくして、文を知る者に非ざるなり」(注2)と考え、文章を選ぶにも「文筆浩瀚たりて、以て人の趣を興すを助くるに足る者」(注3)を採用した。ここから、呉氏が『左伝』の文を非常に重視したことがわかるが、評釈の内容は文章を論じることを主とするのではなく、「史事を比附し(＊並べ)、其の成敗得失を辨じて、勧戒に資する者以て多きに居り、間論文の旨に及」んだ(注4)。形式の面では、この本は一般的な評釈のように眉批(＊欄外上への書き入れ)、旁批(＊行間への書き入れ)などの方法を採用するのではなく、評釈の内容を各節の後に置いている。商務印書館が一九一五年にこの書の初版を出して以降、一九三〇年、一九三三年、一九三五年にそれぞれ再版が出された。当時における影響力の大きさがわかろう。

呉闓生・劉培極合評『左伝文法読本』と呉闓生『左伝微』との二書は関係があり、前者は後者の初稿である。『左伝文法読本』は、呉、劉両氏が宣統元年に共同して完成し、後、呉氏がそれを基にさらに自説を練り、劉説の優れたものも残した上で『左伝微』を完成し、一九二三年に北平文学社から刊行された。呉氏は「左氏の書を著すや、其の文章必ず首尾自ら具はるも、首尾尽くは経文と相ひ附すこと能はず。其の伝を分かちて以て経に隷くは、乃ち漢の経師の為す所なり」(注5)と考えた。そこ

でこの二書は紀事本末体を採用し、「『左氏』原文に一字の増損も無きも、但だ之が為に次第を移易し」、「章巻を画分するに馬驌『左伝事緯』を以て藍本と為し稍之が為に更定し」たが、馬氏は事を主としたのに対し、呉氏は文を主としている(注6)。二書の篇の分け方は同じで、批評も似通っており、『左伝』の文法（＊筆法）を明らかにしようとしている。呉氏は『左氏』の文法（＊筆法）の妙を、逆摂、横接、旁溢、反射等のいくつかの形式にまとめた(注7)。書名は初め「文法」としたが、後に「微」と改めた。これは、呉氏が『左伝』の文法（＊筆法）を示すことで、『左伝』の微言を明らかにしようとしたからである。彼は「聖門の学 微言有り 大義有り、『左伝』一書 大義の外に微詞眇旨尤も多し。此の編 専ら『左氏』の微言を発明するを以て主と為す。故に名づけて『左伝微』と為す」と言う。ここから、清末民初に生きた呉氏が、依然として経学の立場に立ち、評釈の方法で『左伝』の微言を明らかにしようとしたことがわかるであろう。

林紓『左伝撷華』は、紀事本末体を採用し、『左伝』の文章八十三篇を選び、各篇に題をつけて、題の下に魯公の紀年を記している。体例は、先に『左伝』の伝文を並べ、注釈を交え、評語は文章の末に本文より二段下げて置いている。林氏は『左伝』の文学上の価値を非常に評価し、「行文を以て論ずれば、『左氏』の文は万世古文の祖なり」、「天下の文章、能く変化し陸離として方物すべからざる（＊変幻自在で捉えることができない）者、只だ三家有り、一は左、一は馬、一は韓のみ。『左氏』の文、能はざる所無く、時時其の行陣を変へ、陣に望む者をして其の陣図の出づる所を審かなること莫からしむ」(注8)と考えた。そこで、その評釈は、内容は桐城派の文章論を採用し、形式は文章が優れる箇所には圏点をつけている。林氏のこのような評釈は伝統を固守し現実に抗ったものであったと言える。と言うのは、一九一七年一月、胡適が『新青年』において『文学改良芻議』と題する文章を発表し、白話文を文言文に替えようと主張し、すぐに陳独秀、銭玄同らの賛同を得、白話文運動が起きていたからである。五四運動が勃発し、この運動はさらに加速した。このような流れの中、古文の大家である林紓は一貫して古文廃止に反対し、「古文の当に廃すべからざるを論ず」「古文白話の相ひ消長するを論ず」などの文章を書いて古文廃止に反対し、北京で講習会を開いて、古文を読むことを提唱し、講義に使った桐城派の大家姚鼐の『古文辞類纂』の名篇を解説付きでまとめて『『古文辞類纂』選本』を出版した。彼はこのような

行動により白話文運動の支持者の批判対象となり、錢玄同に「選学妖孽（＊駢儷文の妖怪）」「桐城謬種（＊桐城派の鬼子）」と攻撃された（＊「胡適之に寄す」（『新青年』三巻六期））。『左伝擷華』は、林氏が亡くなる三年前の一九二一年に出版され、冒頭の「附記」にも「評論当を失ふ処に至りては、則ち年老ひて精神及ばざるなり、識者 之を諒せ」(注9)と言う。この本が書かれたのは五四運動前後で、林氏と新文学運動の旗手たちが論争を繰り広げていた時期であった。

林紓の作品が時流に逆らった作だとすると、楊鐘鈺『春秋左伝擷要』と何漱霜『左伝文法研究』とは時流に沿った作であった。楊氏の書は、清人司徒修『左伝易読』の体例に倣い、『左伝』の文章の一部を抜いて（原文「約選」）、注釈を加えている。ただ、楊氏は、『左伝』原文を多く刪改し、『易読』の眉批、旁批はなく、篇末には胡安国、馮李驊、姜炳璋、馬驌等の人の評論を引用し、文章の重要な所には圏点標注を付けている。楊氏は自序で「科学盛興してより、読経講経 勢ひ遍及し難し。窃かに謂へらく、六経は吾華国粋にして熟読熟講し以て根柢を厚くし賢才を培はざるべからず、と。因りて要を提げ繁を芟り、『六経擷要』を編成し、以て日力を省き初学に便ならんとす。…因りて先に『春秋左伝擷要』を将て印に付す」(注10)と言う。楊氏のこの序は一九三〇年の作で、新文化運動が「科学」「民主」を提唱してからすでに十数年が経っていた。さらに「古史辨」運動において経典が疑われ、経学はすでに官学ではなくなり、儒家の経典はすでに必読書ではなくなっていた。大衆がますます疎遠になるのも時代の趨勢であった。このような背景の下、楊氏がこの書を作り、初学者の読みやすさを求めたのは、仕方なしという面もあっただろうが、時流に乗るものでもあった。何氏の書は、商務印書館「国学小叢書」の一つとして、『左伝』の文章を選んで十のテーマを設定し、各テーマの下に数篇の文章を収めている。各篇の末には、『左伝』の行文、叙述方法、書法、用語等に対する何氏の論評を伝文より一段下げて並べている。用語はわかりやすく、初学者が読むのに適している。

以上のように、新旧交代の時代にあって、『左伝』の評釈も強くその時代を反映した。一方で、伝統を固守し、西洋式の新式標点も採用しないものがあった。例えば、呉闓生は文法（＊筆法）の分析を通じて『左伝』の微旨を明らかにしようとし、林紓は文言文と文法を固守した。その一方で、時代に適応しようとする試みも見られた。楊鐘鈺、何漱霜の二氏の作がその例である。

（二）注釈

この時期の注釈書は二種類に分けることができる。一つは、新式標点を加えずに、研究的視点から『左伝』に注釈を施すことに重点を置く著作である。主な著作に、廖平『春秋左氏古経説義疏』、劉師培『春秋古経箋』、張驥『左氏秦和伝補注』、張其淦『左伝礼説』、余謇『左伝補注抄撮』等がある。もう一つは、経学の変化を反映し、普及を目的とした注釈書であり、主な著作に、梁寛・荘適選注『左伝』、王伯祥『春秋左伝読本』、韓席籌『左伝分国集注』、張寄岫選輯『左伝選読』等がある。こちらはすべて新式標点を採用し、体例は『左伝』原本に拠らずに、みな選注であり、改編を加えたものも多く、紀事本末体もあれば、国別体になっているものもある。

廖平、劉師培はともに清末民初の非常に著名な学者及び経学家であり、彼らは伝統経学の立場に立って『左伝』に注解を施している。一九〇八年に完成した廖平『春秋左氏古経説義疏』（別名『春秋左氏古経説』、『春秋左氏古経説疏証』等）は、彼の最も重要な『左伝』学の著作である。廖平は『左伝』の内容は紀事の『左氏伝』と解経の『左氏説』の二つの部分に分けられると考えた。そこで、彼の『左伝』学では『伝』と『説』とを区別し、それぞれ『左氏伝』（紀事の文）と『左氏説』（解経の作）として録し、それぞれに疏証を作った。この書は、彼が『左伝』の中の解経、設例の部分を取り『春秋』経と合わせて、疏証を加えて完成したものである。つまり、『左伝』を解経の作とするのがこの書の中心テーマであり、広く諸儒の説を採り『左伝』の解経、明義、設例の部分に解説を加え、杜預『春秋経伝集解』に修正を加えている。この書の価値は、まさに李耀仙が言うように、「廖平は漢人以来ずっと「『春秋』に伝しない」と思われていた『左氏春秋』を一変させて、能く『春秋』に伝する『春秋左氏伝』とし」、「劉文淇『左伝正義』の跡を継いで、広く漢儒の賈、服諸人の説を採り、杜説の不足を正した」[注11]点にある。劉師培『春秋古経箋』は『春秋』経文に箋注を加え、劉師培は古文学の学者であったため、その注を付ける経文は『左伝』が載せるものであり、その注も『左伝』と杜注、孔疏等を基本とし、義例（＊体例）でもって『左伝』を説くのは劉氏の『左伝』学の一つの重要な特徴であり、この箋注の中の多くの内容は『左伝』の義例（＊体例）を導き出すものである。

張驥『左氏秦和伝補注』（成都義生堂一九三五年刊本）は、『左伝』が載せる秦和の事に対して、杜預と孔穎達の正義の基礎の上に更に踏み込んだ注釈を加えたもの

で、補注の内容は詳細かつ精確であり、『左伝』の中の秦和の内容を全面的かつ正確に理解しようとする場合に参考にする価値がある。張其淦『左伝礼説』は、『左伝』中で礼に言及する箇所を抜き出して論説を加えたものである。この二書は『左伝』の中の特定テーマを扱う注解である。余謇『左伝補注抄撮』は集解の性質を有する著作であり、体例はまず「隠元年」など魯国の紀年を並べ、次に伝文を並べ、次に書目中の各家の説を録し、顧炎武、恵棟、馬宗槤等十八家の清人の説と『国語注』及びその他の経史注釈をまとめて挙げ、最後に顧棟高『春秋列国地形口号』の中のすべての詩と補遺とを録している。年ごとに抄録するものではなく、余氏が注釈を補充する必要があると考えた内容を取り上げている。この本は清代の重要な学者の『左伝』の伝文に関する見方を一所に集めており、それらを概観するのに便利である。ただ、余氏の評説と按語はなく、余氏自身の考えを知ることができないのが残念である。

梁寛・荘適選注の『左伝』は、商務印書館出版の中学高校用の学生国学叢書の一つであり、馬驌『左伝事緯』に倣って、春秋期の周室の衰微及び諸侯の争いの特徴的な所から『左伝』の文章を選び、注釈を加えている。この本の分量は少なく、選定しているのは「鄭荘の跋扈」「斉桓の霸業」「宋襄の野望（原文「宋襄図霸」）」等など計十篇で、冒頭には梁寛の緒言があり、『左伝』の価値、真偽と『春秋』経との関係、作者等の問題を論じ、巻末に「春秋重要各国年表」を付している。全篇に新式標点を採用し、注文は主に杜と林の説を抜き、諸家の説も交えている。梁寛は、『左伝』は『春秋』を解釈する書だと信じず、『左伝』中の解経の語句は劉歆が竄入したものだと考えたために、『左伝』が「中国の歴史上、文学上、重要な位置を占めるのは、それが『春秋』を解釈する書だからという理由ではない」(注12)と言った。それ故、この書の文章選定は『左伝』の文学上、史学上の価値を明らかにすることに重点を置き、選文は「読者が手本とし鑑賞するに足る」(注13)ものとし、取り上げる事はすべて時代の変遷に関わる大事であり、解経の語句は削っている。この書は当時非常によく売れ、一九三四年一月に初版が出た後、一九三六年九月にすでに第四版が出版された。その後、張寄岫が中学（＊日本の中学高校）国文補充読本を編纂する際、『左伝』部分の材料と注釈はすべてこの書から取っている。

『春秋左伝読本』は、抗日戦争が全面的に勃発した後、王伯祥が選注した著作である。当時、王氏は開明書店の編輯者であり、一九三八年、この本の選注を開始した当

初は、活頁（＊ルーズリーフ）文選を作って開明書店を維持したいと考えていた（陥落により多くの産業が潰えた）。ただし、「矧や種性凋残（＊民族困窮）の際に当たり、先民（＊先賢）の手沢の綿存する（＊綿々と引き継ぐ）は、尤も特殊の意義有りと感ずるや」、「窃かに自ら魯陽の戈を強揮する（＊英雄的武事）に比す」という気概で、『左伝』を選注することで、前線に出て敵と戦えない遺憾を埋め、抗戦必勝の願望と自信とを表そうとしたもので、一気呵成に、二年の内に七五〇頁もの大冊を完成した。王伯祥は、『左伝』に関しては「経を翼く云々と雖も、宜しく旃を舎くべし」とし、『左伝』を解経の作とすることに賛成しなかった。ただし、また「然らば則ち先秦の旧聞を治め及び文章の流変を探討せんと欲する者は、此の書猶ほ当に奉じて大宗と為すべし」というように、『左伝』の史学上、文学上の価値は認めていた。故に、文章選定の「着眼は史実を考ふると文を学ぶとに在り、是を以て取材は一に史事の発展を以て綱領と為し、兼ぬるに文采辞令を以て指帰と為」(注14)した。王氏がこの書に選注を作ったのは「将に纂して学校誦読の本を為らんとす」ためであり、対象とする読者は学生で、注釈は杜注孔疏を主とし、まま清人が前人を越えた説を採用した。そのため、王氏が『左伝』に選注をした着眼点と目的は梁寛・荘適両氏と基本的に同じである。違うのは、王氏は、紀事本末体を採用せずに、『左伝』のもともとの編年体を維持し、選んだ内容は梁・荘両氏に比べてずっと豊富であったことだ。この書の影響は大きく、五六十年代に度々重版が出されたことは、下文で詳述する通りである。

韓席籌『左伝分国集注』は、紀事本末体と国別体の二者の特徴を合わせ、『左伝』に改編選注を行っている。この書の選文は馬驌『左伝事緯』と呉闓生『左伝微』が編輯する篇目を取り、いさかか変更を加え、周と魯、斉、晋、宋、鄭、衛、陳、蔡、楚、秦、呉、越等十二諸侯国に分けて、計百十五篇を選び、十二巻としている。韓氏の注は広く諸家を採り、杜預、林堯叟二氏の注については「其の至りて要なる者を択びて之を存し、注上に但だ其の姓を標し」、馬驌、呉闓生二氏の注については「某曰く」と冠し、この四氏以外の人の論注は姓字を記して区別し(注15)、韓氏の自説は「按ずるに」の字で始めている。同時に、この書は『左伝』の評釈類の特徴を継承し、各篇の最後に短い評論を置き、篇中の人物や事件などの評価を下しており、読者が事のいきさつを深く知るのに極めて便利である。

以上のように、この時期の『左伝』の注釈書は、伝統

的経学の立場に立ち、『左伝』は解経の書であると強調する著作もあれば、近代的学術分類体系に立脚して、『左伝』を重要な文学価値や史学価値を有する古籍として、普及を目的とした注釈書もあった。過渡期にあって伝統と現代とが並存していた特徴を見ることができよう。

(三) 訳注（原文「注訳」）

白話文を提唱する必要から、古典文献を白話文に翻訳して簡単な注釈を付けることがこの時期の文献整理の重要な方法になった。それはちょうど当時の訳注者であった費恕皆が「現在の中国は白話が文言に取って替わる途中で、各学校も白話に変わった。『左伝』は国文の手本であり、白話の解がなくてよいはずがない。そこで『左伝』の詳節を、一段一段、一字一句、白話に直した」(注16)と言う通りである。訳注の目的から見れば、普及を目的とするものもあれば、時事に感じて作られたものもある。普及を目的とする著作には、主に費恕皆『春秋左伝音義白話注解』、秦同培『言文対照左伝評注読本』、秦同培、宋晶如『(広注語訳) 左伝精華』、許嘯天『左伝活頁文選』があり、時事に感じて作られたものには、主に呉佩孚『春秋左伝浅解』、『春秋正議証釈』等がある。

費恕皆『春秋左伝音義白話注解』は『左伝』中の重要な伝文を選んで標題を付け、割り注（原文「随文夾註」）形式をとり、順番に「伝文」「音義」「解」（すなわち白話翻訳）を並べる形式で訳注をしている。費氏は序の最初に「『左伝』の筆法、『左伝』の文体が優れたものであることは皆が知り、教師も『左伝』を講じ、学生も『左伝』を読み、学校の国文ではみな『左伝』を手本としている」(注17)と言い、この本の選訳の着眼点は『左伝』の文学方面の成果を明らかにすることにあると述べている。この本は新式標点符号は採用せず、伝文には「句点」を、解文には「読点」を用いている。

秦同培『言文対照左伝評注読本』、秦同培、宋晶如『(広注語訳) 左伝精華』の二書はともに部分訳である。選定している伝文から見ると、後者は前者に比べて「石碏 州吁を寵するを諫む」「臧僖伯 魚を観るを諫む」「鄭荘公 守臣を戒飭す」「臧哀伯 郜の鼎を納るるを諫む」「寺人披 文公に見ゆ」「子産 楚を却け 女を逆ふるに兵を以てす」の六篇が多い。体例から見ると、前者は後者に比べて「評」が余分にあり、「伝文」「評」「注」「訳俗」（白話翻訳）を順番に並べる形式になっており、その「評」の部分は上述の評釈の類と同様に、左氏の用筆、行文などについて評論している。後者の体例は、

「伝文」「注釈」「語訳」（白話翻訳）となっている。注釈から見ると、後者は前者より詳しい。訳文は大同小異である。標点符号の採用については、二書はともに白話翻訳部分では新式標点符号を採用し、その他の部分は「句点」を用いている。費氏の書が『左伝』の文学面を重視するのとは違って、秦、宋二氏は、『左伝』は我国の史学の祖であり、文学の中でも第一の書であると考え、学生の必読書であるばかりではなく、政治社会に心を寄せる者も必ず考究すべきものだとした(注18)。ここからわかるように、この二書が対象とする読者は比較的広く、『左伝』の価値を非常に高く評価するものであった。

許嘯天『左伝活頁文選』は『易経公羊伝左伝活頁文選』の中の一部であり、中華書局が一九三三年に出版した「中学生必読紅皮活頁文選」の一つである。対象読者が中学高校生であることから、全書で新式標点符号を採用し、内容は簡単なものを選び、「鄭荘公 守臣を戒飭(ちょく)す」「呂相 秦を絶つ」の二篇のみである。体例は、伝文、白話訳文、重点字詞、人物、事件の注釈が順番に並んでいる。

呉佩孚『春秋左伝浅解』『春秋正議証釈』の二書は、呉佩孚の『左伝』訳注であり、後者は前者を基礎として整えられた。そこでここでは主に後者を紹介したい。『春秋正議証釈』は四巻で、隠公の部分だけに注を施す。体例はほぼ、経文、白話釈訳、『左伝』伝文、白話翻訳、歴代注解、師承正義、各家附解、余義、時評などとなっている。すべての条にこれらの項目が揃っているわけではなく、具体的情況に合わせて出入がある。呉氏はもともと学問を専門とする人ではなく、注の多くは時事に即して発したものであり、厳密な学術研究から見ると附会の語が多い。ただ、その中から映し出される時代の変化と『春秋』学との関係は我々の注目に値する。

（四）その他

評釈、注釈、訳注という成果の他に、現代の文法理論に基づいて伝統的句読を施した本、標点のみの選集本、読書札記、特定テーマの選集、白話故事などの類型がある。

黄侃(かん)が一九二六年から一九三〇年に校定し一九三二年に再び改正した『手批白文十三経』は、文法理論に基づいて十三経に句読を施したものであり、陸宗達が言うように「句読は章句の基礎であり、季剛先生は一貫してこの仕事を重視された。先生が句読の仕事を精確にできたのは、前代の各派の経説を広く採用し先入観を持たなかった以外に、先生が最も早い段階で先進的な言語科学

の方法を吸収したことにもよる」(注19)。黄氏は各経書の個別の状況により、全部で九四種の符号を用いて校定を行い、『左伝』では、「経文の文末には『.』を用い、伝文には『〇』を用い、伝文の対話部分には『、』を用い」、「諸字の下に連続して『〇』を加えるのは、左氏の語が全書の條例に及ぶことを表し」、「文の横に『|』を引くのは、君子曰くあるいは仲尼曰くを表し」、「文末に『△』を加えるものは、筆法が本書の経伝を見ればわかることを表す」(注20)。句読は古書読解の基本作業である。時代を代表する国学の大家であった黄侃も、晩年に句読の方式で『左伝』など十三経を校定し、長年に渡る経学研究の成果を傾けたのである。黄氏の校定は、現代学術理論の中国伝統学術に対する影響を反映しつつ、一方また中国数千年の経学の伝統を反映するものであり、一朝一夕に打ち破れるものではない。

馬厚文『左伝纂読』は標点だけを付けた選集本である。この書は「紀事本末の考えに倣い、事件によって分類し、類ごとに文章を選ん」でいる。馬氏が光華附属高校で教えていた時の作であり、当時の『中学課程標準』国文課程の中の専門書精読の要求に依拠して編纂し、中等学校（＊中学高校）の教育に供せんとしたものである。国文課程の一つであることから、「本書の選文は、当時の重要な史実や文学的おもしろみに富むものや文学上重要な故実を主としている。文学を鑑賞することを主目的とし、史実を明らかにすることは二次的目的とした」(注21)。この書はもと馬氏が授業で用いた教材であり、注釈と翻訳は口頭で解説する内容であったため、新式標点符号を加えるのみで注釈と翻訳はない。

喩松雪『一部春秋之国際教訓』は『左伝』についての特定テーマの選集であり、主に『左伝』の中の興亡成敗、吉凶禍福に関わる言論事実を選んでいる。内容は五類に分けられ、各類の下にいくつかの伝文が選ばれ、伝文の内容に基づく適当な標題を冠し、割り注で簡単な注を附し、文章の後に呂祖謙『東萊博議』の関係する論説を「呂東萊論」として並べ、最後に作者の按語を置いている。喩氏がこの書を作った目的は、『左伝』の中の各国の教訓を参考にすることにより中国の対内、対外政策を分析し、「以て一般の愛国青年及び政治に関心を有する人の参考に供せんとした」(注22)ことにある。ここから、この書が濃厚な時代的色彩を帯びていることがわかろう。

朱文叔『児童古今通左伝故事乙編』は『左伝』の中の内容を、直接白話文で故事を述べ、各故事の後に注釈を附し、地名、人物、行事などを解釈している。この書の

対象読者は児童であり、簡単でわかりやすく、当時は非常に人気を博し、中華書局が一九三一年に発行してから、一九四一年時点で既に第四版が出版された。

以上をまとめると以下のようになる。経学の衰退と教育体系の変化とにより、『左伝』は既に学生や大衆の必読書ではなくなり、一般大衆は『左伝』とますます疎遠になり、さらに白話文も普及した。そのため、この時期の『左伝』の整理は、『左伝』の文学・史学的価値を明らかにすることに重点を置き、大量の学生及び大衆向けの普及読物が出現した。これらの作品の注解は主に先人の成果を採用した。一方、激変する時局、内憂外患という国情の下、『左伝』の整理も現実の政治と社会の影響を強く受けた。同時に、この時期は伝統から現代へと向かう過渡期であったために、伝統的句読、評者、注解と新式標点、白話翻訳などとが並存していた。この時期の成果は、『左伝』を紀事本末体や国別体に作り直したものや選集であり、廖平『春秋左氏古経説義疏』の他は、『左伝』全書に全面的な注解と翻訳を行ったものは一冊もなかった。これも徐々に経学の後ろ盾を失った『左伝』の状況を反映するものであろう。文献整理は既に経学時代とは同じではなかったのである。

二、一九四九年～一九七六年

一九四九年に中国共産党が大陸で新中国を成立してから、大陸地区の社会制度と政治的形勢は大きく変化し、「マルクス主義が学術研究の指導思想となり、政治イデオロギーが学術活動を統制した」(注23)。さらに「文化大革命」の進行により正常な学術研究が中断され、中国の伝統文化は時代遅れで反動的なものの代名詞とされ、儒学は再び無情な迫害と破壊を受けた。このような背景の下、『左伝』の整理成果は非常に限られ、民国期の著作を復刻する他は数少ない新作しかなく、しかもすべて「文化大革命」以前のものであった。

具体的に言うと、この時期に復刻された民国期の著作は、中華書局が一九五七年に開明書店校定（原文「排校」）の原版によって重印した王伯祥『春秋左伝読本』、江蘇人民出版社が一九六三年に出版した韓席籌（ちゅう）『左伝分国集注』があった。新作は、瞿蛻園（くぜい）『左伝選訳』（春明出版社、一九五五年）、朱東潤『左伝選』（古典文学出版社、一九五六年）、施瑛『左伝故事選』（上海文化出版社、一九五六年）、『左伝故事選訳』（中華書局上海編輯所、一九六一年）、徐中舒『左伝選』（中華書局、一九六

三年）など数種があった。

この数書の中、朱、徐二氏の書は選注本（＊選集注釈本?）である。朱氏『左伝選』は、馬驌『左伝事緯』を参考に、紀事本末体の形式で、「鄭荘小霸」「楚武始強」「斉桓霸業」等十三篇の国家大事に偏った叙述を取り上げ、同時にまた鮮明なイメージ作りをし、事件のいきさつを生き生きと描き、『左伝』の伝文の文学性を十分に描き出している。朱氏は『左伝』の中の解経の語は後人が加えたものだと考えたため、選文中の解経の部分は宋朝体で印刷している。注釈は、主に杜預の『春秋経伝集解』と洪亮吉の『春秋左伝詁』を採り、その他の諸家の著述―特に清代の諸家の解経の作品も参照しており、まま旧注と違う所もある。この書を選注した目的が読者に「最も基礎的な選注本を提供すること」にあったため、注釈は卑近なことばで書かれており、黎錦熙主編の『国音常用字匯』によって発音も記している（注24）。『左伝』に見える事実や描写手法を読者によりはっきりと認識してもらうために、選文の終わりには「説明」の一節を置いている。徐中舒『左伝選』は、鄭天挺主編「中国史学名著選」の一つであり、高等教育機関歴史専門課程「史学名著選読」の為に編集された教材である。『左伝』の内容に対して、この書はできる限り紀事本末体を採用しつつも、もともとの編年史の体裁も残し、関係づけが難しい多くの資料を収めている。選んでいる内容は、春秋期の「霸業の興衰」を主とするが、叔向、子産、晏嬰、孔子など春秋時代の著名な政治家や学者の言行や当時の会盟の告、誓、載書（＊盟約書）及び関係する典章制度なども含まれている。注釈は、大部分は『春秋左伝正義』、洪亮吉『春秋左伝詁』、劉文淇等『春秋左伝旧注疏証』、日本の竹添光鴻『左氏会箋』等の書に基づき、その他の各家及び近代の学者の関係書も採用している場合がある。

瞿蛻園『左伝選訳』と施瑛『左伝故事選訳』は訳注本である。瞿氏『左伝選訳』は、「潁考叔」「斉桓公と管仲」「晋献公と晋文公」「秦晋霸を争う」「邲の戦い」「華元と向戌」「鞌の戦い」「鄢陵の戦い」「鄭国の内政外交」「伍員と申包胥」など計十のテーマを巡って、伝文を選んで注釈と翻訳を行っている。この本の編集目的は、一般読者の需要に応じて読者が理解できるようにすることにあったので、重点は文意の翻訳にあり、注釈は非常に簡単で、字音、字義及び人名、地名などの問題を重点的に解釈している。同時に、読者が選文の内容を大まかに理解できるように、選文の前に題辞解説に類する文がありその主要内容を概括している。施氏『左伝故事

選訳』は、「古典文学普及読物」の一つとして選集されたもので、「鄭荘公兄弟 相い争う」「曹劌（けい） 戦を論ず」「衛懿（い）公 鶴を好む」など戦争と人物の故事、計十二篇を選んでいる。その体例は、まず説明の文章があり、選んだ伝文の内容を概説し、歴史唯物主義の観点からその中の事件、人物などについて評価を下している。その次に白話訳文が、最後に『左伝』原文があり、原文には、字義、読音、人名、地名などに割り注を付けている（原文「随文夾註」）。施瑛『左伝故事選』は、直接白話に翻訳した本であり、選んでいる『左伝』の故事は直接白話文で翻訳しており、『左伝』原文を引かずに、各故事の末尾に説明があり、故事に対して簡単な評論があり、故事の題名の含意と『左伝』のどこに見えるかを示している。以上三種の書は、すべて一般大衆を対象とする普及読物であり、篇幅も小さく、重点は古文を白話文に翻訳し、読者の閲読の障害を取り除くことにあった。その評論もまた強烈な時代的特色を有し、「階級闘争」と封建倫理を批判する内容とが多い。

この時期、香港・台湾では民国期の学術の伝統が継続したとは言え、『左伝』の整理においては、やはり民国期の学者の著作を再版することが主で、新しい著作は少なかった。再版された著作は、大陸で出版された王伯祥、韓席籌の著作以外では、梁寛・荘適選注の『左伝』があった。香港龍門書店は一九六六年に、台北華世出版社は一九七五年に、それぞれ韓席籌『左伝分国集注』を再版し、台湾商務印書館は一九六四、七〇年の二回、梁寛・荘適選注の『左伝』を再版している。王伯祥の『春秋左伝読本』の再版の情況は更に複雑で、王氏の名を題して全体を再版したもの以外に、節録や他人の名前で再版されたものもある。例えば、台北五洲出版社は一九六八年に王伯祥の名を題してこの書を再版している。また、台湾開明書店は一九五八年に「開明書店選注」と題する『左伝選読』を出版しているが、実際は、若干標題を付け足すだけで、王氏『春秋左伝読本』を節録してできたものである。〔同様に〕五洲出版社は一九六八年に、袁少谷注釈と標する『左伝詳釈』を出版し、一九七一年の再版の時さらに「褚博雅校訂」と加えているが、実際は、この書も王氏の書であり、頁数まで全く同じである。新しい著作には、沈継先校『春秋左伝白話新解』（文化図書公司、一九六四年）、李純一『左伝選読注』（自由太平洋文化事業公司、一九六五年）、李宗侗（とう）『春秋左伝今注今訳』（台湾商務印書館、一九七一年）等があり、その編纂目的も普及を主としているが、〔その中で〕李宗侗の書が最も重要である。李宗侗の同書は、王雲五

が一九六七年に提唱主編した「古籍今注今訳叢書」の一つであり、体例は、経文・伝文、今注、今訳となっており、経文を挙げてはいるが、注と訳は伝文に対してだけであり、注釈は文字単語・衣冠文物などに詳しく注釈を付ける他、地名には現在の地名を、年号には西暦を挙げており、学習者の閲読に便利である。

以上のように、特殊な政治環境により、当時の『左伝』の文献整理は低迷し、発表された成果も非常に限られていた。ただ、強い意志を持って一貫して『左伝』の文献整理に専念した人もおり、ただ発表する機会がなかっただけである。例えば、呉静安氏が一九五七年に誤って「右派」のレッテルを貼られた後も、なお『春秋左氏伝旧注疏証続』を書き続け、「文革」終結後に原稿を出版社に出したが、様々な原因があって、この書は二〇〇五年にようやく東北師範大学出版社から出版された。また、周知のように、劉文淇一門は四代に渡って『春秋左氏伝旧注疏証』を執筆し襄公五年までしか至っていなかったが、呉氏は独力で続きを完成し、劉氏の樸学の主旨を守りつつ、漢学盲従により客観性を失った劉氏の門戸の見からの脱却を果たした。〔この書は〕二十世紀『左伝』文献整理の最重要作の一つと言うべきであろう。さらに、楊伯峻『春秋左伝注』は、二十世紀の五十年代に既に資料収集を始め、徐々に長編となり、『論語訳注』『孟子訳注』の完成後は、『晋書』の校訂（原文「校点」）以外の全精力が『左伝注』の執筆に注がれた(注25)。「文革」期に長い間仕事を中断しても、氏はあきらめることがなく、この書は一九七七年冬、終に全体の完成に近づいた(注26)。「文革」期のこれらの学者のたゆまぬ努力により、「文革」後の『左伝』の文献整理の成果が繁栄する基礎が築かれたのである。

三、一九七六年～一九九九年

一九七六年以降は、政治の撥乱反正（＊正常化、軌道修正）により、思想は解放を迎え、伝統文化は再び尊敬され重視されるようになった。学術界は、儒学、伝統文化及びその経典に対して客観的な研究と整理を開始し、次第にブームとなった。これにより、『左伝』の文献整理は二十世紀で最も盛んな時期を迎え、多くの成果を生み、「五四」運動以来最も良い『左伝』の注釈書が出現した。

（一）注釈

この時期は、単純な注釈本は比較的少なく、主なもの

に、楊伯峻『春秋左伝注』（中華書局、一九八一年初版、一九九〇年修訂）、王淑均『左伝菁華』（上海教育出版社、一九八八年）、于富章『春秋左伝釈読』（南海出版公司、一九九二年）、郭丹『春秋左伝直解』（江西人民出版社、一九九三年）、胡安順主編『左伝紀事精選』（三秦出版社、一九九三年）、銭仲聯主編『十三経精華』中の『左伝精華』（湖南教育出版社、一九九二年）などがある。

その中、楊伯峻『春秋左伝注』は、最も有名なものである。疑古思想の影響や避けがたい個人の学力の限界により、この書は標点、注解が妥当性を欠く箇所もあり、出版されてから多くの人が検討と質疑を呈している。ただし、この書が楊氏が古今の左氏注疏の成果を総括し現代の学問方法で『左伝』の注釈と整理を行った力作であることは否定できない。博引旁証で大量の文献資料を参照し、先人の研究文献、筆記、現代の国内外の学者の研究論著及び甲骨文、金文などの考古発掘資料の引用は全部で四百種余りに達している。その注釈の内容は豊富で、詳細かつ妥当で、考証は精密である。この書は「五四」運動以来の『左伝』全文に対する新注で最も優れた著作であり、一九九二年に「第一回全国古籍整理図書コンクール（全国首届古籍整理図書奨）」で一等賞を獲得し、現在、中国古代の文史哲関係の学者の必携書となっている(注27)。

于富章『春秋左伝釈読』は、呉楓、宋一夫主編の『中華儒学通典』の一部であり、その体例は、経文、伝文の原文、割り注（原文「随文夾註」）となっており、その注釈の重点は文脈を明らかにすることにあり比較的簡単である。郭丹『春秋左伝直解』は『十三経直解』の一つであり、于氏の書と同じく、この書も割り注（原文「随文夾註」）形式を採用しており、主に難字と難単語の発音と意味を明らかにし、文や文脈が通るようにしており、「文の意味を通すことは、翻訳とは違い、その文本来の意味を解説することに重点があり、その文と前後の事件との関係を指摘したり、その文が前後の文脈の中でどのような役割があるかを明らかにしたりすることにある」(注28)。このように、この二書の編纂目的は、研究考証ではなく、一定レベルの古文読解能力のある読者がスムーズに『左伝』を読解できるようにすることにあった。于氏、郭氏の二書が全本に注釈するのとちがって、王淑均『左伝菁華』、胡安順主編の『左伝紀事精選』は選注本（＊一部の注釈本）である。王氏の書は、霸主、戦争、会盟、令徳、嘉言、明智、篡弑、無道の八分類により『左伝』の伝文を選び、表題をつけている。各類の

前には総述があり、その後に題目と伝文があり、それに対する注解をし、最後に伝文の内容に分析と評価とをしている。胡氏の書は、『左伝』の中の優れた部分を選び、紀事本末体とし、注釈を加え、伝文の原文以外に、内容紹介、図解、注釈、附録、簡評などの内容がある。杜預、孔穎達、楊伯峻三家の注を中心に、自分の意見も交え、職官、姓氏、名物、制度、難語、疑句などを注釈している。対象読者が一般読者であるため、その注釈は「専門家も一般人もともに楽しめることを目指し、博引旁証や踏み込んだ考察は目指さなかった」(注29)。高海夫氏はこの書は「先人の旧注を博覧し簡潔にまとめるだけでなく、今人の最新研究成果も吸収し、精察という点で発展があり、詳細という点ではもっとも力を注いでおり」、「専ら史学方面に力を注ぎ、文学方面に言及することは稀である」(注30)としている。銭氏主編の書は、主に『左伝』中の大小の戦役、外交辞令、書札文字などの内容を採り、大部分は曽国藩『経史百家雑鈔』の題目を題とし、簡単な注釈を加えている。

(二) 訳注(原文「注訳」)

訳注は、この時期の『左伝』整理の主要な形式であり、成果は多く、部分訳注(原文「選本注訳」)と全訳注(原文「全本注訳」)の二種類の形式がある。

部分訳注の成果は、主に王守謙『左伝選訳注』(貴州人民出版社、一九八五年)、林新樵(しょう)『左伝選』(福建教育出版社、一九八五年)、林根生編著『左伝外交辞令賞析』(広西人民出版社、一九八九年)、沈玉成『左伝選訳』(人民文学出版社、一九八九年)、陳世饒(じょう)『左伝選訳』(巴蜀書社、一九九〇年)、来可泓(おう)編著『左伝名句選訳』(中国青年出版社、一九九四年)、呉賢明主編『左伝今鑑』(四川人民出版社、一九九五年)などがある。王守謙の書は、『左伝』から五十篇の代表的な文章を選び、「できるだけ詳しく精確な注釈と通俗的でわかりやすい翻訳を目指し、簡潔に分析、評価、説明を行っている」。この書は中程度以上の文化水準を有する読者が古文読解能力を高めるのに適し、大学の文系の学生や青年教師の参考にもなる(注31)。林新樵『左伝選』は、高校以上の文化程度を有する干部、知識青年及び大学高校の青年教師が自習する用に編纂されたもので、篇目選定は春秋時代の重大史実と文学方面の代表的な名篇に着目しており、各篇に詳細な注釈、訳文、説明が加えられている。沈氏『左伝選訳』は、「中国古典文学今訳叢書」の一つであり、『左伝』の文学的価値に着目し、『左伝』の原文五万余字を選び、内容によって標題を作り、題の下に説明が

あり、選定した文章の芸術技巧や故事の背景を紹介している。注釈は主に楊伯峻『春秋左伝注』を参考にしており、翻訳は沈氏が先に出版した『左伝訳文』（以下、詳しく紹介する）を基礎とするが、この書（『左伝訳文』）が楊氏『春秋左伝注』とセットの書であり「原文の理解については専ら楊氏の意見を基準にしており」(注32) 沈氏の個人的意見を提示しにくかったため、沈氏はこの部分訳注本において個人的考えを披露している。陳氏『左伝選訳』は、高校古委会（＊正式名称「全国高等院校古籍整理研究工作委員会」）が編纂した「古代文史名著選訳叢書」の一つであり、普及を目的とし、『左伝』の原文約三万余字を選び、選定内容は重要な歴史事件の記述か代表的な文学名篇であり、注釈、翻訳は先人の著作を参考に良いものを取っている。以上の数冊の伝統的な部分訳注本と比べ、林根生、来可泓の著作は特定テーマを扱う選注であり、呉賢明の著作は実生活での活用に重きを置いている。呉氏のこの書は「多く不義を行えば、自ら滅亡を取る」「子を愛するに道有り、教うるに義方を以てす」などを標題とし、下に『左伝』の伝文を録し、その後に簡単な注釈を付け、次に、訳文、「評釈と応用」と続き、現実に結び付けて論述を展開し、現実の社会生活に歴史の教訓を提供することを目指している。

全訳注の成果は、馮作民『白話左伝』（星光出版社、一九八三～一九八四年）、王守謙、金秀珍、王鳳春『左伝全訳』（貴州人民出版社、一九九〇年）、張燕瑾（きん）主編『文白対照全訳左伝』（国際文化出版公司、一九九三年）、顧宝田、陳福林『左氏春秋訳注』（吉林文史出版社、一九九五年）、銭伯城主編『白話十三経』中の『左伝』（国際文化出版公司、一九九六年）、馬玉梅、斉石宜注訳『春秋左伝』（大連出版社、一九九八年）、李夢生『春秋左伝訳注』（上海古籍出版社、一九九八年）、舒焚審校、魯開泰訳注『春秋左伝訳注』（武漢出版社、一九九八年）、丁遠『訳注左伝』（花城出版社、一九九八年）、呉兆基編訳『春秋左伝』（京華出版社、一九九九年）等がある。馮氏の作品は二年の時間を費やして作られ、「白話」と題するが、実は訳注であり、体例は、経文、伝文、訳文、注釈が並ぶ。この書の訳文は、できる限り意訳を採用し、文脈がスムーズにつながっている。注釈は、人名、地名、制度などに重点を置く。ただ、注意を要するのは、この書は、一九八九年の岳麓書社による再版の時、経文、伝文、注釈が削除され、訳文のみになったことである。王守謙等『左伝全訳』は、前述の『左伝選訳注』を基礎として補充して完成したものであり、『左伝』伝文、注釈、訳文はあるが、選注本の説明部分はない。

張燕瑾、魯開泰、丁遠、呉兆基、馬玉梅、斉石宜の書も体例は大体同じであり、みな経文、伝文、注釈、訳文がある。ただ、張氏の書では、訳文が前で注釈が後にあるのに、丁氏の書、呉氏の書、馬、斉氏の書では、注釈が前で訳文が後にあり、魯氏の書では、訳文が前にあり、注釈は割り注形式で原文の中に混じっている。顧宝田、陳福林の書は、解題、原文（経文、伝文を含む）、注釈、訳文の四つの部分からなる。前述の数冊の書と違うのは、この書は経文だけに白話翻訳をし、伝文には訳文がなく注だけがある点である。ある学者はこの書を評して、「通俗的な読みやすさ」「練り上げられた簡潔さ」「全書を貫く系統性」などの特色があると言っている(注33)。銭伯城主編『白話十三経』中の『左伝』も通俗読本であるが、前述の数書が一節の訳文と注釈をいっしょに挙げるのと違って、この書ではまず『左伝』全体の翻訳を挙げ、次に原文を挙げて白話の注釈を加えている。李夢生の訳注は、経文、伝文を並べ、それに対して注釈と翻訳を行い、注釈は先人の注、特に楊伯峻『春秋左伝注』を参考にして、人名、地名及び一部の難語を説明し、訳文は主に沈玉成『左伝訳文』を参考にしている。

以上のように、この時期の訳注は、すべて普及を目的に作られたもので、いくつかの共通点がある。一つは、大多数の著作が翻訳に重点があり、注は訳文に役立てるためのものだという点である。ちょうど馮作民が「ここの所謂『注』は、主に訳文の不足を補うためであり」と言う通りであり、その理由は「古文の字句を白話訳の中で一々しっかり説明しようとすると、行文の流れを損ない文脈を分断するし、ましてやあれこれ引っ張って来すぎては蛇足の嫌いを免れない」(注34)からである。二つ目は、これらの著作は基本的にすべて中程度以上の文化水準の読者が『左伝』を自習し理解するために作られたものであるため、通俗・簡明を重視し、「語の解釈が簡単で手薄過ぎることがあり」(注35)、語句の翻訳が原文から乖離している場合がある点である。

(三) 訳本

訳本とは、注文がなく訳文だけがある成果を言う。この時期の『左伝』の訳本は主に、沈玉成『左伝訳文』（中華書局、一九八一年）、楊伯峻、徐提『白話左伝』（岳麓書社、一九九三年）、楊伯峻評析、沈玉成原訳『評析本白話左伝』（北京広播学院出版社、一九九三年）、完顔紹元『語文版春秋左伝』（上海書店出版社、一九九八年）、孫方裏編著『左伝―列国風雲図』（春風文芸出版社、一九九二年）等がある。

これらの著作の中、前の三書が最も重要であり、すべて楊伯峻と関係がある。沈玉成『左伝訳文』は、楊伯峻の指導の下、楊氏『春秋左伝注』に合わせて作られたもので、楊氏の注に既に経伝の原文と注釈があるため、この書はただ訳文のみになっており、経文は比較的簡単で楊氏の注を読めば意味がわかることから、伝に対してだけ翻訳をしている。沈氏の訳は、完璧なものではないが、非常に優れた訳であると言え、呉楓は「訳文は精確適切で、かつ滑らかで生き生きしており、原作に忠実で原作の特徴と文体の風格（原文「語言風格」）を保持している。現代中国語の言語習慣にも合いスムーズに読める。この書と楊氏の『注』とを合わせれば、読者が『左伝』の原文を読むのに非常に便利であろう」(注36)と評価している。この書はこの時期の最も重要で最も影響力のある『左伝』訳本だと言えるが、重要な点は二点ある。一つは、何度も刊行されたことである。一九八二年に台湾源流出版社、明文書局、木鐸出版社など多数の出版社がこの書を刊行し、一九九五年に台湾洪葉文化事業公司がこの書を再刊し、中華書局は二〇〇二年、二〇〇五年、二〇一一年にそれぞれこの書を再刊した。二つ目は、以後の『左伝』の翻訳が多かれ少なかれすべてこの書を参考にしたことである。『評析本白話左伝』は、王寧主編の『評析本白話十三経』の一つであるが、実は『左伝訳文』であり、ただ本の前に楊伯峻が書いた『左伝』に対する「評析（評釈）」を加えて手引きとするに過ぎない。楊伯峻、徐提『白話左伝』は、沈玉成『左伝訳文』と大同小異であり、文章はさらに通俗的である。完顔紹元の書は、柏楊版『資治通鑑』の風格をそのまま摸倣し、『春秋』と『左伝』を白話に改編し、第一冊「中原逐鹿」、第二冊「晋楚争霸」、第三冊「冷戦風雲」、第四冊「呉越春秋」の四冊に分け、体例は、まず章分けし、各章ごとに題目があり、内容は年代順に並べ、各年に主要諸侯国の年号を記し、次に経文の原文があり、その次に直接、（伝文の原文は載せずに）翻訳された伝文を載せており、ままに「紹元曰く」で始まる評論を載せている。前四者はみな全訳本であるが、孫方裏の書は抄訳（原文「選訳」）であり、『左伝』の中の重要な内容を選び標題を付け、直接、白話訳文の形式で書き、巻末に「原典精選」という附録を置き、原文を選録するに過ぎない。

上述の数種の著作の他に、九十年代は、伝統文化の研究ブームが起きたことにより、多くの『白話十三経』や『白話四書五経』の著作が出たが、これらの著作はすべて『左伝』の訳本を含んでいる。例えば、栗勁主編『白

話四書五経』（長春出版社、一九九二年）、呉樹平、頼長揚主編『白話四書五経』（国際文化出版公司、一九九二年）、関永礼主編『白話十三経』（済南出版社、一九九四年）などである。

この時期の『左伝』整理の成果は、注釈、注訳、訳本などの他に、単純な標点本や『左伝』の内容に依拠して白話や時には絵本（原文「連環画」）の形式で編纂した『左伝』故事がある。標点本は、主に蔣冀騁（きてい）標点『左伝』（岳麓書社、一九八八年）、顧馨、徐明校点『春秋左伝』（遼寧教育出版社、一九九七年）、及び呉根友点注『四書五経』（中国友誼出版公司、一九九三年）、陳戍（じゅ）国点校『四書五経』（岳麓書社、一九九一年）などの書が収める『左伝』等々がある。故事本は、主に赫（かく）永輝・陳日朋『左伝故事新編』（北方婦女児出版社、一九八六年）、周雍萱（ようけん）『左伝・戦国策故事』（中国国際広播出版社、一九九二年）、龔（きょう）汝樞、丁世弼等編絵『左伝中国歴史名著故事精選連環画（治国篇、外交篇、戦争篇、風範篇）』（二十一世紀出版社、一九九二年）、儲（ちょ）兆文編著『左伝故事精華』（陝西師範大学出版社、一九九四年）などがある。その他、何人かの学者の『左伝』の文献整理の著作が再版された。例えば、上海古籍出版社は一九七八年に、施瑛が一九六一年版の基礎の上に修訂増補した『左伝故事選訳』を、一九八二年に瞿蛻園『左伝選訳』を出版し、中華書局も一九八五年に徐中舒『左伝選』を再版した。

以上のように、二十世紀初期に白話文の提唱と経学の転換とが始まってからこの時期までに既に半世紀余りが経っており、少数の専門研究者以外は文言文及び経典に既に疎遠になっていたが、「国学ブーム」と「伝統文化研究ブーム」が起きたことで、人々に『左伝』という経典を理解したいという欲求が湧いた。このような背景の下、大量の『左伝』整理の成果が生まれたが、単純な注釈では大部分の読者の『左伝』を読解したいという要求を満足させられなかったため、この時期の成果は訳注本と直接〔白話に〕訳した〔白話だけを載せる〕訳本を主とし、単純な注釈本は比較的少ない。

政治制度と学術環境が変化したために、従来の文献整理が主として研究を目的としたのとは異なり、二十世紀の『左伝』整理は普及に重点が置かれた。西洋の学術と白話文普及の影響を受け、この時期の整理には、新式標点や白話翻訳など、以前にはなかった形式が現れた。普及に重点が置かれたため、研究目的の整理は少なく学術的に影響力のある著作は比較的少ない。だが、『春秋』経伝の普及を促し、『春秋』学の研究を推進するために

良好な基礎を築いた。同時に、『左伝』の独特な価値を鑑み、学界はその研究を継続し、廖平『春秋左氏古経説義疏』、呉静安『春秋左伝旧注疏証続』、楊伯峻『春秋左伝注』などの優れた注釈本も生まれた。

注

(1) 李衛軍『『左伝』評点研究』(北京：中国社会科学出版社、二〇一四年)

(2) 呉曾祺『左伝菁華録』自序(上海：商務印書館、一九三五年国難後第二版)

(3) 呉曾祺『左伝菁華録』凡例(上海：商務印書館、一九三五年国難後第二版)

(4) 呉曾祺『左伝菁華録』自序(上海：商務印書館、一九三五年国難後第二版)

(5) 呉闓生『左伝微』例言九則(北平：文学社刊本)

(6) 呉闓生『左伝微』例言九則(北平：文学社刊本)

(7) 詳しくは、呉闓生『左伝微』「与李右周進士論『左伝』書」(北平：文学社刊本)を参照のこと。

(8) 林紓『左伝擷華』序(同氏著『左伝擷華』、上海：商務印書館一九二一年初版、二～三頁。)

(9) 林紓『左伝擷華』(上海：商務印書館一九二一年初版)四頁。

(10) 楊鍾鈺『春秋左伝擷要』序文(同氏著『春秋左伝擷要』、民国間無錫書院衙錫成印務局排印本)

(11) 李耀仙「『春秋左氏古経説疏証』刊行的幾点説明」(『廖平選集』下冊(成都：巴蜀書社、一九九八年)所収、一八一頁。)。

(12) 梁寛「緒言」(梁寛・荘適選注『左伝』(上海：商務印書館、一九三六年九月第四版)所収、六頁。)

(13) 梁寛「緒言」(梁寛・荘適選注『左伝』(上海：商務印書館、一九三六年九月第四版)所収、一〇頁。)

(14) 王伯祥「述例」(同氏著『春秋左伝読本』、上海：開明書店、一九四〇年一一月初版、一九四八年十一月再版)

(15) 韓席籌「例略」(同氏著『左伝分国集注』、南京：江蘇人民出版社、一九六三年)

(16) 費恕皆「春秋左伝音義白話注解序」(同氏編『春秋左伝音義白話注解』、上海：群学書社、一九二一年九月初版)

(17) 費恕皆「春秋左伝音義白話注解序」(同氏編『春秋左伝音義白話注解』、上海：群学書社、一九二一年九月初版)

(18) 詳しくは、「言文対照左伝評注読本編輯大意」(秦同培『言文対照左伝評注読本』(上海：世界書局、一九二六年五版)所収)及び「(広注語訳)左伝精華凡例」(秦同培、宋晶如『(広注語訳)左伝精華』(上海：世界書局、一九三七年)所収)を参照のこと。

(19) 陸宗達「季剛先生与『手批白文十三経』」(湖北省人民政府

文史研究館『黄季剛先生逝世五十周年誕生一百周年紀念集』（武漢：湖北省人民政府文史研究館、一九八六年）、四八頁。）

（20）黄侃「符識説明」（『黄侃手批『白文十三経』』（上海：上海古籍出版社、一九八三年）、八頁。）

（21）馬厚文「左纂纂読例言」（同氏編選『左伝纂読』（上海：華社、一九三三年）所収）

（22）谷神序「一部春秋之国際教訓序」（喩松雪『一部春秋之国際教訓』（上海図書館蔵本）所収）

（23）楊世文『近百年儒学文献研究史』（福州：福建人民出版社、二〇一五年）、二七頁。

（24）朱東潤「左伝選前言」（同氏著『左伝選』（上海：古典文学出版社、一九五六年）所収）

（25）『中国語言学家』編写組『中国現代語言学家』第二冊（石家荘：河北人民出版社、一九八二年）、二八五～二八六頁。

（26）沈玉成「左伝訳文説明」（同氏著『左伝訳文』（北京：中華書局、一九八一年）所収、一頁。）

（27）張燕娣、詹紹維「『広收異本精於校勘―論楊伯峻『春秋左伝注』的校勘成就』（『語文学刊』二〇〇三年第六期）

（28）郭丹「春秋左伝直解前言」（同氏著『春秋左伝直解』（南昌：江西人民出版社、一九九三年）所収、三頁。）

（29）胡安順「左伝紀事精選前言」（同氏主編『左伝紀事精選』（西安：三秦出版社、一九九三年）所収、二頁。）

（30）高海夫「一個青出於藍的『左伝』選本―読『左伝紀事精選』」（『陝西師範大学学報』一九九五年第一期）

（31）王守謙「左伝選訳注前言」（同氏著『左伝選訳注』（貴陽：貴州人民出版社、一九八五年）所収、四頁。）

（32）沈玉成「左伝選訳前言」（同氏著『左伝選訳』（北京：人民文学出版社、一九八九年）所収、一頁。）

（33）劉憲魯「評『左氏春秋訳注』」（『社会科学戦線』一九九五年第四期）

（34）馮作民「白話左伝序」（同氏著『白話左伝』上冊（台北：星光出版社、一九八三年）所収、二頁。）

（35）劉憲魯「評『左氏春秋訳注』」（『社会科学戦線』一九九五年第四期）

（36）呉楓「従『左伝訳文』談談古文献翻訳」（『古籍整理研究学刊』一九八六年第一期）

＊本稿は、国家社会科学基金項目（13CZX039）、四川省哲学社会科学重点研究基地儒学研究中心重点項目（RX14Z03）、国家社科基金重大項目『巴蜀全書』（10@zh005）、四川省重大文化工程『巴蜀全書』（川宣2012.11号）の研究成果の一部である。

【訳者附記】

一、本稿での関係用語の日本語訳

・整理　→　文献整理（＊煩瑣になるため、「整理」のままにした箇所もある。）

・標點　→　日本でも中国学では通じる語だと考え、あえて「句読点」とは訳さなかった。

・校點　→　校訂（＊「点」は句読点を付けることだが、その点、訳語には反映できていない。）

・評點　→　評釈（＊「点」は圏点を付けることだろうが、その点、訳語には反映できていない。）

・評析　→　評釈（＊本論文表題においては省略した。原書名を尊重しママにした箇所もある。）

・（隨文）夾注　→　割り注

・選編　→　選集

・編撰、編寫　→　編纂

・選注　→　とりあえずそのまま。選集注釈本？（部分注釈本？）

・選譯　→　抄訳（原書名を尊重しそのままにした箇所もある。）

・注譯　→　訳注

・選本注譯　→　部分訳注

・全本注譯　→　全訳注

・導讀　→　（読書の）手引き

・節選　→　節録？

・印行　→　刊行

・翻印　→　復刻（＊翻刻も考えたが…）

・重印、重新排版　→　再版

・仿宋字　→　宋朝体

二、訳文に原語をそのまま採用し日本語の説明を加えた場合は「原語（＊元のことば）」のように表し（＊は湯城の追加を表す）、原語を訳したが参考のために原語を示す場合には「元のことば（原文「原語」）」のように表した。また、湯城が文脈を補った場合には〔また〕のように表した。

三、引用は、原文が古文調の場合は書き下し文に直し、白話の場合は現代日本語に訳した。

四、中国の「中学」（初級中学三年＋高級中学三年）は、日本の中学校、高校を指す。一方、「高校」（高等学校）は、日本の高等教育機関（＝大学）を指す。本稿では、基本的に日本語に直したが、書名などで日本語に改めていない場合があるので注意されたい。